

細川豊史／山口重樹 監訳

臨床医のためのガイド：

# オピオイド乱用・依存を回避するために



慢性腰痛症で苦しむ患者が、NSAIDsより強い鎮痛薬の処方希望するとき、日本の医師の多くはトラマドールの使用に抵抗はないが、強オピオイドのフェンタニルの使用にはきわめて消極的であるのが現状だと思われる。しかし、本書の最後に山口重樹教授が記されているように、日本でも慢性痛に対するオピオイドの解禁という“パンドラの箱”を開けてしまった今、米国の姿を、日本もこれから追うのではないかと、との危惧が高まっている。

その米国では1990年代初頭から慢性痛におけるオピオイド使用量が急激に増加し、乱用・依存に苦悩している。本書はその苦悩する米国の2人の医師が、慢性痛におけるオピオイドをなんとか適切に使用できる状態にしたいとの思いから執筆されたものである。これから慢性痛の治療にオピオイドを使おうという日本の医師にとって、まさに知っておきたい内容が基礎から臨床にわたって網羅されている。本書を理解するためには、まず日本と米国における慢性痛に対するオピオイド療法の発展の違いを知っておくことが望ましい。そこで、日本における状況が簡約されている「日本語版でのあとがき」を、最初に読むことをお勧めする。また乱用、依存症、耐性、身体的依存などの用語の定義を第1章でしっかり理解することが、その後の章を読み進める上で混乱を避ける助けになる。

「序文」には、重要なメッセージが記載されている。“臨床医にとって、痛み、依存と戦う義務はお互いに排他的なものではなく、切り離せないものである”という一文と、“患者のオピオイド摂取を管理する鍵は、依存の可能性をスクリーニングし、慎重に治療の進み具合をモニターすることである”という文である。慢性痛治療に関わるすべての医師に向けられた日本語版の本書は、日本が米国の二の舞を踏まないための対策書ともいえる。日本と米国は、人種、文化、法律などが異なるので、そこまで注意する必要はないという意見もある。しかし、こ

- ・ 真興交易(株)医書出版部
- ・ 2013年8月15日 第1版第1刷発行
- ・ A5変型判/268頁/並製本
- ・ 定価(本体3,200円+税)
- ・ ISBN 978-4-88003-862-9

れから慢性非がん性痛にオピオイドを使用する医師にとって、本書に記載されている患者スクリーニングやオピオイド使用中のモニタリングに関するさまざまなツールの内容を大まかに理解しておくだけでも、毎日の臨床に役立てることができるかと確信する。

一方、周術期管理でオピオイドを毎日使用する麻酔科医にとっても、本書を読破することは全く新しい視点を得ることができるチャンスである。オピオイドを長期間服用している患者が手術を受けることになった時、そのオピオイドを周術期中止するか継続するかの判断や、もし、その患者が依存症を呈している場合や過去に乱用していたと考えられる時、麻酔や術後鎮痛で使用するオピオイドの使用法に迷うことがある。本書はその回答を与えてはくれないが、大きな一助になるはずである。

「痛みをもつ患者ではオピオイドによる乱用や依存症は生じない」という以前の考え方は、ヒトという複雑な生物においては、それほど簡単でないことが分かってきた。オピオイドを処方する医師にとって、本書は最新の考え方や臨床での対応の仕方を学ぶことができる絶好の一冊である。

廣瀬宗孝

(兵庫医科大学麻酔科学講座)